戦後７８年　平和の尊さを語り継ぐ

戦争体験、平和への願いを子どもたちに伝える
～短歌に託した核廃絶への思い～

昭和２０年８月、広島・長崎市に原子爆弾が投下されました。同月１５日には太平洋戦争が終結し、今年で７８年を迎えます。

２１世紀の現在、ロシアのウクライナへの侵略は今なお続いています。国際社会の平和と秩序、安全を脅かす行為は、断じて容認することはできません。核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さと愚かさを語り継ぎ、平和の尊さを次世代に引き継いでいかなくてはなりません。

「被爆体験語り部」として、自身の戦争体験を後世に語り継ぐ活動をしている伊丹市原爆被害者の会の会長・小泉雄次さん（８６）に、原水爆禁止伊丹協議会理事長・元見三郎さんが話を聞きました。

小泉さんは、市内の小学校で、「被爆体験語り部」として自身の戦争体験を後世に語り継ぐ活動をしています。

今、いちばん言いたいこと。

広島の平和記念公園は、今は広々とした美しい公園で外国から偉い人たちがたくさんお話に来られるところだけれど、それがどういう場所なのか、２尺（約６０センチメートル）も地面を掘れば人骨が出てくるような場所であることを、皆さんはちゃんと理解しているのだろうか。

そこは、はじめから何もなかった場所ではありません。原爆が投下される日までは、木造の家屋が立ち並び、大勢の人々が暮らしていた場所でした。一瞬に地獄絵図と化した中で、身元のわからない大勢の死者の遺体が焼かれました。きちんと焼かれていない遺体もたくさんありました。

その片付けのきちんとされないまま、土砂を埋めて整地して作った公園です。悲しみも恨みもそのまま残したまま、いわば墓地そのもののような場所なのです。

小泉さんが被爆されたのは８歳の時。広島市内に勤めていた父親を捜して、母親と一緒に市内に入りました。足の踏み場もないがれきの中、市電の走っていた道路の跡だけは、辛うじて道であると分かり、人が歩くことができたと話します。

小泉さんの父親は奇跡的に救出されていて、宇品港から宮島へ移されていました。あちこちの病院を転々として、数年がかりでようやく回復されたようです。同じように自分の父親を捜しに来ていた人は、ようやく焼け焦げた父親の弁当箱だけを探し当て、遺骨の代わりに郷里の宮崎に持ち帰ったそうです。

当時、見聞した出来事を後世に伝えるべく、小泉さんは短歌に託して詠まれています。

◆わが父の原爆体験　結論は　心の底から
　戦争呪う

千田町　広島女子高等師範学校にて

◆一瞬に校舎倒され　もうもうと　砂煙高く舞い
　暗闇になりき

◆先生！　助けてください！　お母さん！
　校舎の間に挟まれて　上向きの人　下向きの人

◆校庭の　テントの中にごろ寝する　隙間より見る
　青い火　赤い火

８月８日　浅野図書館にて

◆広間には魚市のごと　死体あり　顔をのぞきて
　歩む人あり

死体処理　紙屋町交差点にて

◆投げ込める　重なり合った死体には　油をかけて
　焼き縮ませり

◆偉い人は　最後のひとりまで戦えと言いんさるが
　親も子も家内も死んで　何になるのか

◆むさぼりて　荒らしつくすなこの地球
　後の世に生まれ来る　人々のため

（「広報伊丹」令和５年８月１日号掲載）